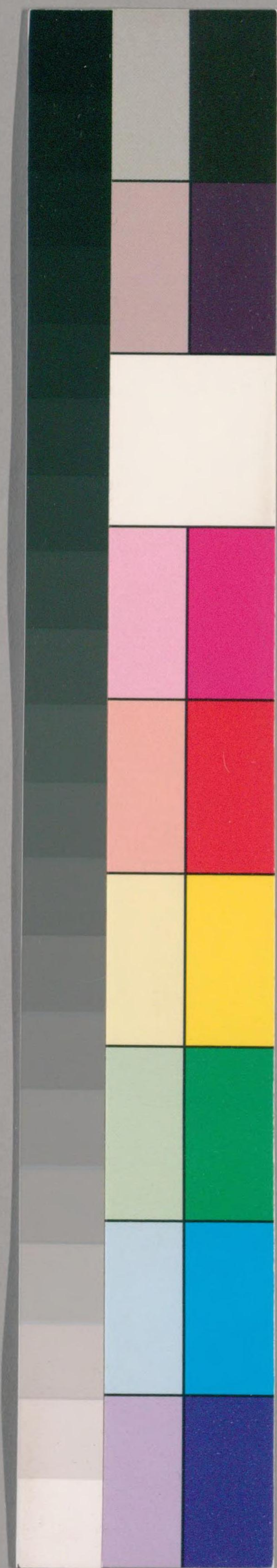


誹諧諸集訂誤

863
170



八三三十一



謙心乃世成貞享元祿より

ト多撰集い

牙儀ハ

家乃

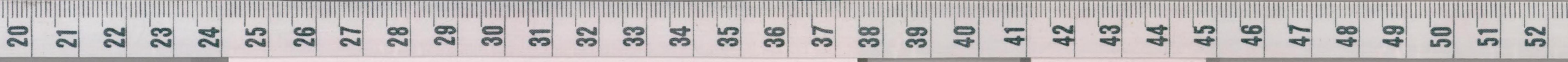
瑞學の

法ハ

草ハ

後ハ

...



あきと他へおのれん事とゆふに余
迷了るれ飛と肩よりく上木乃
沙汰不ゆふ何そ子つ不替ふ人
此標準一しゆさ所んや

天明^三壬寅

潮見下

仲冬上浣

桂五



誹諧諸集訂誤

烏雀菴布磧校



いさしゆ抄さふかハ

ゆかぬ名もゆきうハ一巻の草

珍碩

しこまこ際の子息え一ぬ

翁

とありはよふもむらうと一夏はさめぬ

とまをうろもこしちと分てんまハ字れぬ

本を入ふ家あゆハしそま老う二十五ヶ際

此両分とれしむらうやとさめぬと中仍

せしより書林れ心しして世をるまを考るに
必ら改るう句相ハ時しそりくよくあるが
せうふと其相奇と始連飛を時これ風体と
いつのあり師の句も世にひこせよまを
事ふまを考るふふとつくはる當れ罷す
あしす

一 吾子難於集、蓬羽唐崎の句れ回言とより事
さく波でもり入はる師とて
世らたもの花とえらうか

一 離僧影式、云々色一れ燈句し

あふたよと春日れくく玉は海 字紙

とせら心致しうめ言とえら字紙がは固阿の句し
一 因書和僕のとりとす中云安倍仲丸帰朝せん
十家と詩と紙とて美家くありと相いづく

日本、晁卿、舜、帝都、征帆、一片、達、蓬、壺
明月、不、還、沉、碧海、白雲、秋色、滿、蒼梧
詩、仲、丸、と、と、磨、ぐ、あ、れ、原、中、ま、け、る、ま、の、日

少老いふ山に山ありしと海に詩あり道は回
 りて家いれれれ情月感一言があてきて人と
 吟嘆せし心はかる神に理と下略 是李白の詩
 ろきと送別の時とあきいふとせしうさあは
 仲九帰朝乃ら病ぎしあうくぬがの津より船
 出りし離風よあひして安南まで吹けけらと
 李白の詩九死しうとたきいひけり李白詩集
 哀傷部 哭晁卿行として上詩あり梅と明月
 不還沉碧海のあてとて返してまど病あく詩

詩奇なるはゆりて家と似て遠くあてて人と送別
 情言の川はゆりて一向あて合て哀傷の詩あて
 とあては糸の糸あてて身や書の誤はあててあて
 かり杜撰の糸又達達壺とキケてあてはゆり
 綾逢壺に往て李白詩集とて王維の詩八仲九と
 送る糸とて唐詩選とて世の人あててあててあて
 はんてあて

一 雙山集 日本武蔵のあててあててあててあててあてて
 ともあててあててあててあててあててあててあててあてて

記ハ御火焼之老人と云く童ノハあはれり

一 同集云方葉ノ川ノあはれり云々持

と云く危ノ身ノあはれり云々

是保方ノ上ノ危ノ身ノあはれり

一 宗院法師云おれノまじりておれあはれ中

炉園ノ遠きと云く

上略 紅葉愛 源氏傳傳方(丑)ノあはれり

くも強よと云の中おれあはれり

あはれり云とありあはれり

あはれり云とありあはれり

あはれり云とありあはれり

あはれり云とありあはれり

あはれり云とありあはれり

あはれり云とありあはれり

あはれり云とありあはれり

一 同書云上略 紅葉ノあはれり

あはれり云とありあはれり

あはれり云とありあはれり

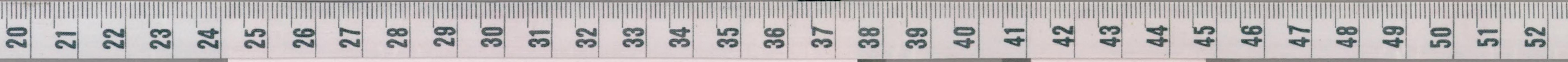
上略
あはれ梅の猿蓑集と云々大根引の事と十月
の事と云々下略 号注 猿蓑集八巻挿舎の
選を於大根引の事と云々あ書ありて能信不
小治と云々大根引の事と云々あ書ありて能信不
西条此取ら大根引の事と云々於定る事と云々
の事と選席の御事と云々白馬の御説は伴ありと云
本文及注に宗院法師の事と云々あ書ありて能信不
と云々あ書ありて能信不
あはれ大根引古来より狂りて冬季に記初是城樓

季と云々大根引の事と云々あ書ありて能信不
引もたせと云々其書寛永十八年の用後と云々
かゝると云々既百字十年乃余と云々あ書ありて能信不
の名目と云々既百字十年乃余と云々あ書ありて能信不
らんと云々あ書ありて能信不
と云々あ書ありて能信不
あ書ありて能信不
は大根引と云々大根引の御事と云々あ書ありて能信不
と云々あ書ありて能信不

そしつらうと許さるる後より心を用ひてくも人
まこと深しむ事と俗に云見貞の引伸しつるま
もそまてあつて文様大根碩の化者注者の蓮二九
はれく保るる穿穿するまことれつる下も保る
と一列にまて出れとまて書一ハのま
大根引の名目とつてハ保るるけつるま
又文様の注に様集も句ありとサ一も保る
様集ありつ許六つまてく炭俵と出る

一 風俗文選許六つ瓢辞ヒサガ花はつりつとありて

揚善テキとみづにけし下略揚善とありつるく保る
揚子見達路テキ而哭ナの故事とまて揚子と事とつるま
目分テレニシラたれ善子とまて善子見練絲テレニシラ而泣ナの事
あり人あり志しハ奉るに及ぶ共淮南子とあり
一 同書文州テキと芳野賦ナ袖振ナハ天武帝よりマの舞
と踏む清元天皇ハ玉振人の和ナと下略け文様
まてハ天武天皇清元天皇と帝のまてにる由
清元天皇ハ則天武帝の御事とありてあり
文州ハ文才ありと篤実の子實ありとあり



あまのりくハかの中を仔細く修く事
及今ハ但文選因板ハ文州没後をさし
の巻末もあつてなれり

一 同書本甲の湖水城、徳倉の生食イナシキハ本モトの
うりし下略貝原篤信吾壩治記ニシテ生喫スキ勢別山を
より山の中へ志しく入るり

一 同紙内ハ正樂寺ハ坊々本道堂を善院ニシテハイの
即云伯藏ニシテ寺と云ふに埜鑑ニシテと云ふに南ノ庄
少林寺ハ塔以永徳年中 耕雲菴と云ふり

伯藏ニシテ寺ハ中略 世ハ伯藏ハ約瓶ニシテの相トシテ又ニシテ此寺ハ
殺さる下略大義何ハ相ニシテ伯藏ニシテ世の人先ハ埜ニシテ
殺さる事あり世ハ伯藏ニシテ埜ニシテ相ニシテ相ニシテ
あり又相ニシテ伯藏ニシテ相ニシテ相ニシテ

一 同書許六師ハ説文母ハ考方ニシテ王女ニシテ考方ニシテ
考方ハ判高ハ考方ニシテ法師ハ考方ニシテ考方ニシテ
考方ニシテ考方ニシテ考方ニシテ考方ニシテ
考方ニシテ考方ニシテ考方ニシテ考方ニシテ



此等より書はるは後山遍昭俗名良峯 宗貞道世入時
奇しき性法師ニあるがはる

一 十輪為女抄古菟玖波の六連歌乃集く是中
救済に佛羅とく

歌けりるる我の殿とく

十部三力の初とをみ有りそよ

とかけの得まら菟玖波集雜体連歌詠語の中

茶勺同あ

十部三力の初とをみ有りそよ

一 本朝文鑑番子事とくはあ

一 本朝文鑑番子事とくはあ

茶勺同あ

と云ふと解世あれよりとをみ有りそよと類梅子と云ふ

春暖園抄に坐り吟よつる詞去ありく上ノ句を

又平一とあつて世と云ふと云ふ先の歌を解む

すよ候し因番子と根が之の茶の番子と云ふは後山道世

中ノ人青流と句ありく西の才合丸と云ふは

女三日病中の歌ありと云ふは因世日と云ふは尚

事終らばくすむと吐びと圖書にあらせり辭せ
れるにあはれぬ梅子の晋子の人の送るに
是と記すす一

一 和漢文標利斐文注中云ぬる乃奇

世中乃人一人高のねしと

いふ所がたの才とすかひ道

とあり西行れすあらず権の権教貴英のすあ
半撰集抄をさう又下句たぐりよつと名を
るるもれとあり撰集救世西行の化とあり

ようあやゆりころ連哥隨腦云本後玉中と撰集
西行の化とすし不恒たすとあり

一 後綿武江
治遠上巻連歌権輿といふ所梵灯菴

事社燈宮乃化身と云上書り是ありい後ころり
燈宮ハ梵灯菴と祀る不あり

人ととくく帰家なる後

オハつらの燈乃とあり残らん 梵灯菴

口碑く傳く名匂とせり死存中事社にあはれ
まはりて燈宮と云

一 伯和集ハ芭蕉の五世遠くぬ世に出板をらと

た校合藤末とてそ世の流あり誰待りて半世を
不^レしてゆゑに誤るや^レ守又と未だ^レ不^レ乃
芭蕉の遺是又一向杜撰少く^レ水取やと^レ
又文字と^レもあ^レく^レけ^レる^レ福^レも^レに^レと^レあ
る^レ是^レ疾^レく^レ出^レる^レの^レ芭蕉^レの^レ遺^レ拾^レを^レハ^レ上の^レ二^レ款^レ
他^レに^レ精^レ撰^レを^レた^レく^レ類^レ一^レれ^レと^レた^レる^レよ^レも^レを
た^レふ^レと^レら^レと^レも^レ書^レの^レ誤^レあ^レる^レか^レし^レも^レ

藤末おりのまゝに茶中

ふ^レら^レと^レ箱^レの^レ句^レお^レら^レる^レ吾^レ子^レの^レ雑^レ詠^レ集^レと^レ又^レも^レ

普船の句にほこひあやほう

一 どの巻新式等とぬ^レ他^レの^レ季^レも^レせ^レ正月^レと^レ終^レ万

春^レも^レ春^レの^レ時^レあ^レら^レる^レも^レ初^レ心^レえ^レら^レる^レと

ふ^レの^レ句^レあ^レら^レる^レも^レお^レも^レと^レお^レも^レと^レお^レも^レと^レお^レも^レと

句^レも^レ適^レに^レあ^レら^レる^レ是^レも^レあ^レら^レる^レと^レい^レふ^レも^レ

万^レ春^レ樂^レハ^レ臨^レの^レ舞^レ人^レの^レま^レま^レの^レ唱^レあ^レる^レ半^レや^レ

源^レ氏^レ初^レ音^レの^レ巻^レだ^レら^レう^レ花^レも^レ餘^レ情^レ云^レ西^レ宮^レ夜^レ日

端^レや^レ日^レ舞^レ人^レ起^レ座^レ唱^レ万^レ春^レ樂^レ云^レ詩^レの^レあ^レら^レる^レと^レ舞^レ人

ら^レう^レと^レい^レて^レ其^レ句^レく^レら^レる^レ万^レ春^レ系^レく^レと^レ唱^レあ^レる^レ半^レ

文句ハ驚くて夏ノ暮ハ岷江入楚ニ去リテ注
せり云々と世の訛言事々世の撰者々々先キの書
より々々入るやうにせんきくもりにあつた古武の
抄事々千抄事々どめあつたと云く大々此の名月
なりと云ふ一やえしう其れハ端角に云事々と
まふと云ふは昔事々形と並び書々々に云々
也樂名記に云々季吟山井臨奇の注云々云々
たりと云ふは事々云々此律の事々云々云々
万春樂の名月ハ云々此事々云々云々春事々形の並

よ云々云々云々童蒙句とはあるやゆせり一
と先云々云々書云々云々侍り

一 蕉翁雪見れや云々云々上五文字始を
いふは事々云々事々云々事々云々事々云々
と諸書云々云々云々事々云々事々云々事々云々
云々又文字あり云々云々尾塚本町書林風月録
表徳子云々云々事々云々事々云々事々云々
事々云々事蹟今云々云々事蹟云々事蹟云々
九入云々

印アリ

書林風るやきき
そよ風もやしくそよ
そよ風もやしくそよ
宮に降ゆを結し

いさか

もせ

かみ

こころ

丁卯臘月初

夕道何うにま

豊九才入下斗

横き人等入下斗

今接地の二種とす

お、字、貞亨、丁卯年、あ、天、明、二、部、く、九、十、六、年、
垂、と、氏、名、道、と、之、点、状、孫、物、考、程、又、ち、あ、れ、地、集、の、地、考、

年、出、産、見、一、と、い、ふ、の、集、中、に、ハ、い、さ、う

蒐、園、の、起、し、お、き、ひ、一、申、し、ま、つ、道、

生、物、く、さ、は、け、し、さ、の、ハ、今、家、ま、い、よ

も、れ、を、撓、し、く、洗、垢、水、痕、れ、地、

ア、し、こ、藤、あ、ん、う、二、子、の、六、ハ、協、く、平、

さ、あ、い、く、く、こ、尚、ま、し、く、あ、い

擬寶珠

たへん橋へ

あまが

玉珂子

潮元下へ序へ地はつてくる
——くさす

鳥有居

出

夜夕雲子混雜 任夕到来 不拘座位

武城

名月夕露ぬきふ移る岸の山

蓑太 素丸

柳やこぼししや散れ雛の色

駿府

月巢

あさふかそれ降しりう春の宮

奥州松嶋

白居

あさふか梅さうしりう花くしりう

越後高田

梅至

あさふかさうしりうふ言車や一里塚

可然

あさふかさうしりう月乾輝く遠きりう

挑舟

あさふかさうしりう一聲四百八十寺

此考塚本氏に云く先づ如舟挑舟ハ芭蕉の一人云く云々
語義の一章及まきまきの吟乃一軸也故爾乃真蹟なりと

その他も客れ佳章焉千と家孫とせうさきハきさの
駱人其事あり觀圖とさうしりうはさうしりうハすハ
海ありま海ありとつと能借る名家と移るを

猿のさうしりう波さうしりうれ雲うか

同阿寫

桐羽

小町も待宵ハありなまきん

蘭英

瀧乃柳さうしりうさうしりう又おれても

馬平

豆茶のハさうしりう掃ぬ裕ふ那

同別府

啓平

竹まじりぬくまきさぬ故帳が

同福與

羽瀧

あさふかさうしりう夕面さうしりう時を

新栗津

粗州

あさふかさうしりう都乃四隅が

目央

園庭橋

冷風より毎く久しんさうしん
道跡を接おし傳ふ波干は
疎まらゆこと新くも春は
才の代ふるもゆるる赤
水も自らさかへるまを
中へ括く菅屋をあらう
推しあり傳あり花の六奇
月一感はあり孤子をさす

勢利田中

鶴洲

壺洲

三所吉田

疎林

巴牛

松耶

獅木

遠列平尾

周竹

同懸河

四明

遠列金谷

月哉

同見附

千秋

釋

東籬

蘭兒

可明

ひめ女

とみ女

魯春

同方丈

廬水

郭々穢ちりく月花とつ
香丸や多相重所ありをりり
合歡さうてそんく待おれぬ
故を休す小夜の小恙さうり
風折く橋のりぬ 燕々那
雲さうハ目立ぬとてう 梅
吟む火らゆ根も葉もあかり
片もハ鯉折さうり夕す
取橋を田うハハ人ぬ妙子とも

冬木之 糝 和 山 ありえり
干 掉 也 梅 之 末 尾 也 色 一
青 如 一 岩 画 守 芳 乃 乃 乃 乃
曉 者 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
楷 様 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
狩 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
片 照 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
名 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
昔 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

標谷
尾城

羽千 蘭長 桂五 桂裏 鴈沙 曉臺 白尼 也

名 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
雪 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
数 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
夏 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
書 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

洛東散步

適 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

意朝 宇慶 看古 珉丈 湖六 士朗 六林 砧川

玉川一色くも春の川
追ふんこ牛のゆるじも春の川
秋風しりすゆれぬ馬聖
半道ものり根さねのほり
行啓る古きゆりや堂より
仰けく南も降りり五月園
待もどぬ新よりほりも
中より六鳴言はせ師一渡りも
松原乃路り八何ありんこも

佳鳥
琴巨
雨且
馬靜
鯨波
五楸
一洞
鰐都
把牧

川原乃小春元より中も留り

馬人

屏風の弦よりこころ

古川也於舟後小枯屋花
夕之や空よりこみくさきかくこ
名月也さくさく吹飛小白子酒
遠く宗秋成權きく礎り那
る新也岩の懐も空より
端ひる葉ハきくこし梅花
萍や水は流る花乃影

今章
既立
呂岱
籬菊
乙耳
佳况
不存

崎守乃能 立花のや春の風
臥待の月や田面のま穂と
梅のうらみ 緋のさき

葵東
五甫
素郷

何れ家の夕人乃く

夕鶴も青のあうとそまにりら

万丈

三日月のいしし柳の

左雀

化されし表もあし梅の

六車

不^びくく^くの^く独子、冬牡丹

其潮

於^おし^し中^ちし^し四角^し一^し教帳^し

五朝

夕立や丸残さし一^し一^し白

副竜

物名 たふさか

もさけいのあまのきりてをさし

龍二

蛸牛や思ひ男の太刀乃鞘

問毛

あさりの果は夏中の柳帯し

羅城

あつ雲乃破ん^しや竹の園

担乃

何れよのま^しし^し柳の^しおぬ^しか

白圖

海の故乃長し^しあぬ^しり^し表^し

岳輅

行社や立あ^しく^しる^しれ^し八^し園^しの^しあ

亜満

日坂とていふやうに樹の影六

中山乃雨打月くふふよこも

跡分ん流る智恵や雪はけて

山畑や霜多轉の朝こころ

横幽く更乃屯や指の雲

有意心の紙如とていふの二や樹き

以ていふも根れ花もを目も

珍しい出ず落葉の中や十二洞

芝環のり多掃也あふ園

阿郷

釋咲

杉六

素角

岡西氏

葩香

五風

看經の月ハうーりー牧も

楊子れ梅茂きくくみ鶴も

己園ハまこもあふや中じれ

乃秋の電ふき入まうく

長れ日乃名ハこ言ハ花の山

あーも一日吹くゆうも

是初らの歩あもくか移羽舟

麻きくや一おあもぬ麦延

不歌もつとてもれ考酒代

始郷

梧笠

士綱

亜平

佳笠

箕童

他郎

曙イ

布磧

葦や蘆の葉と花さうら

尾味鏡
春湖

垂老

身の衣しあふあくやあふん

同佐屋
寄潮

かすむ日くまきんしう筆れ松

同鳴海
學子海

仙老下々氏一く別二千代倉とあ号し三は先知足四子海
蝶羽鉄定の二世共芭蕉の門人一く世々風流家とい
蕉翁も以の及及早雪の吟れ自画賛其他真蹟あり
これ数あり尚も世の秀才近代の雅客詞林の教章と
家一あひされ遠近の文人韻士一見と乞うく定まら
らざる二あ三上四云々臨面の塚が鳴海の千代倉五は
東海一と二く三翁四由五松六一七双八乃九名家一〇と移一一る一二

此集よりく揃り餘ふ云布磧大人

辨諧季の奇中名混雜を成訂正する

凡數十れ春秋を種々く一も二選三入四成五以六

て一く二混三諧四季五の六奇七中八名九混一〇雜一一を一二成一三訂一四正一五す一六

初始之編柱相一於二生三好四を五訂六正七す八

神平法會一の二部三澤四の五部六と七章八と九六一〇つ一一

こ一う二ち三く四季五を六求七は八る九凡一〇易一一く一二む一三

と一こ二妙三法四も五没六く七つ八る九魚一〇く一一海一二と一三

道一と二さ三ら四る五の六至七る八と九ら一〇る一一

消

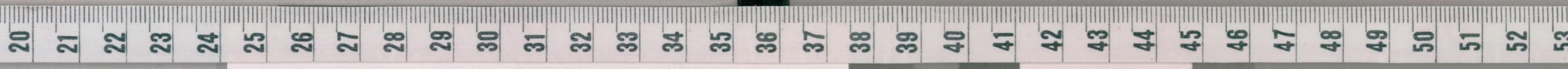
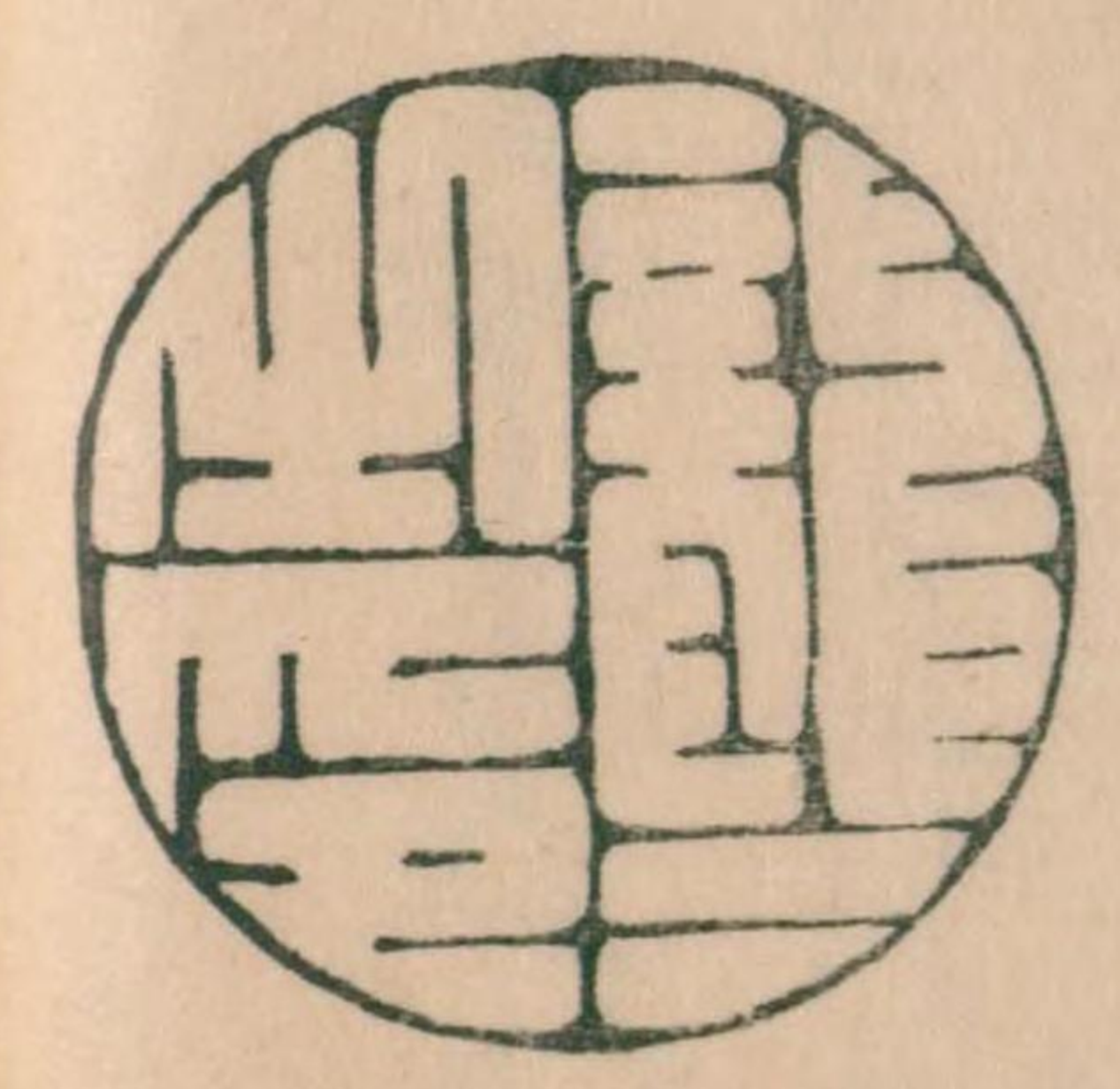
863
170

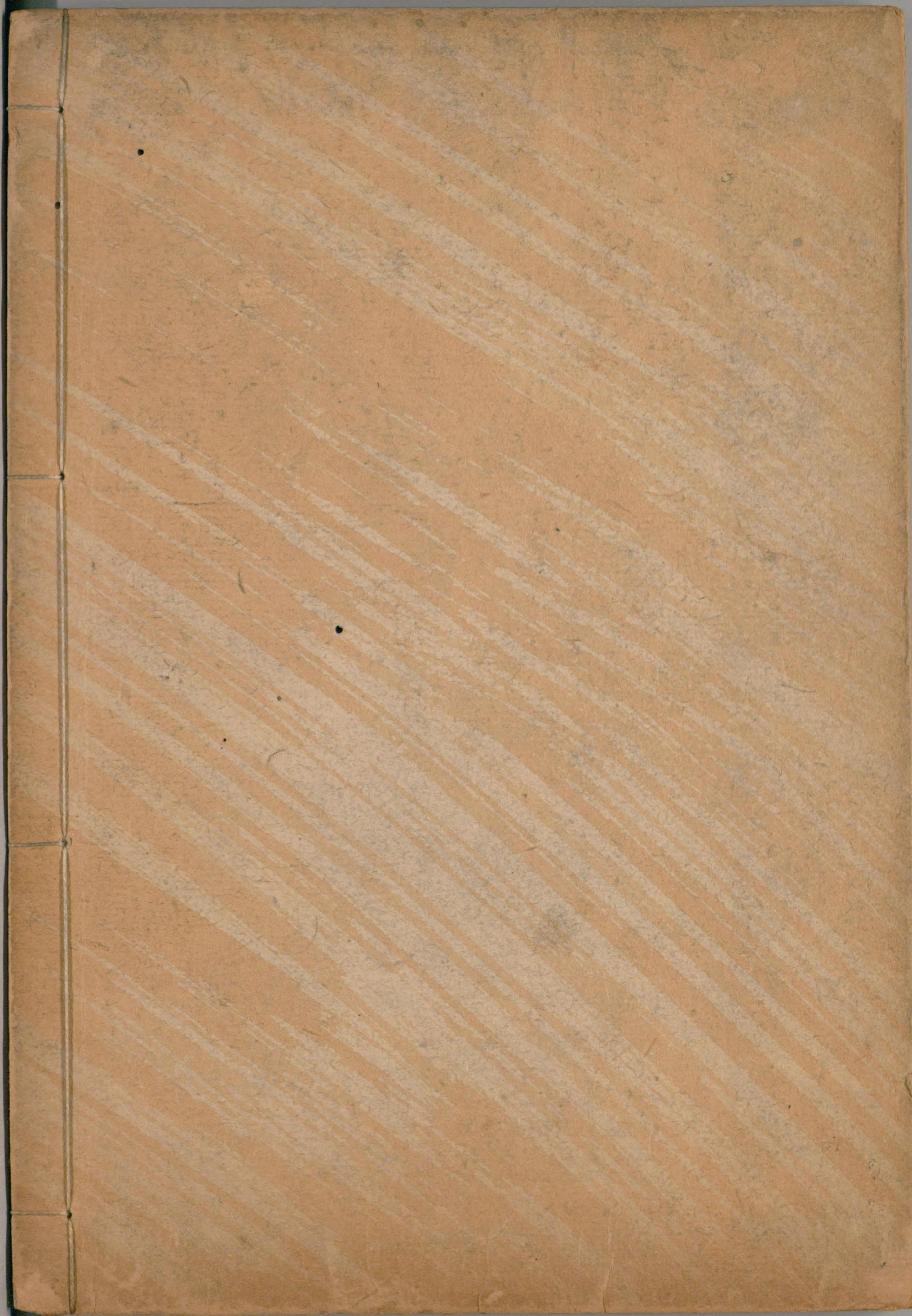
佛書經類出版販賣
和漢洋書藉小説販賣

名古屋官町二丁目
松屋分店
名古屋大角根坂下
松屋本店

14249

是も母子大御より新刻とし
きりまきりしはけりく節の御家と
期に望むの深志ありんまを
便音とせしめり目とねりぬる
はりのせしめりくせんまあや
少りぬ改めりんより定隠藩
金鱗城東正彌舎龍二亂運云々





国立国会図書館 タイトル『誹諧諸集訂誤』 請求記号 863-170

ガラス使用